

## 地域情報(県別)

## 【山梨】全国病院別治療実績・スポーツ障害部門全国3位の実績-落合聡司・国立病院機構甲府病院スポーツ・膝疾患治療センター長に聞く◆Vol.2

2020年2月10日(月)配信 m3.com地域版

全国病院別治療実績(DPC対象病院/2017年4月~2018年3月)スポーツ障害部門で、全国3位の症例数を持つ国立病院機構甲府病院(山梨県甲府市)。スポーツ障害の症例の豊富な分析データを調査研究し、国内外に向けて情報を発信しているという。どのような調査研究を進めているのか、スポーツ・膝疾患治療センター長の落合聡司氏に聞いた。(2019年11月15日インタビュー、計2回連載の2回目)

▼第1回は[こちら](#)

スポーツ傷害で入院中の患者さんと(病院提供)

## —関節鏡視下手術に関する調査研究を進めているそうですが、どのような内容ですか？

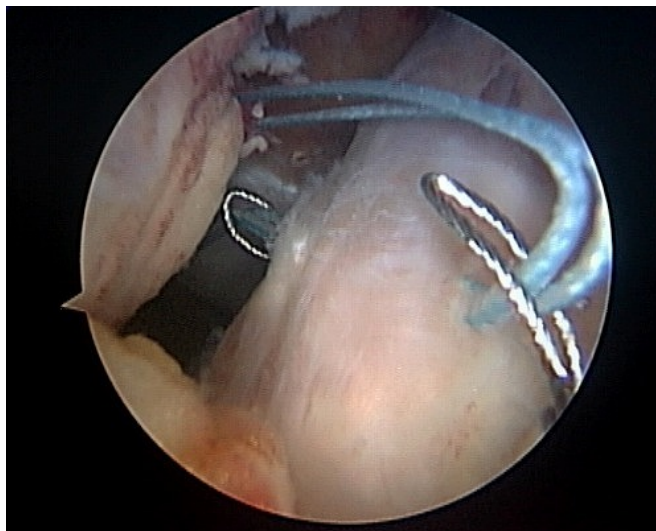
当院は関節鏡視下手術の症例数が多いので、膝関節疾患に対する独自の関節鏡視下手術を開発したり、独自の治療を開発したりしています。

毎日数多くの膝疾患を診ていますので、ときどき世界でも例を見ない疾患に行き当たることもあるんですよ。たとえば膝の中で傷んだ骨軟骨片が反転してくっついた状態になっていたり、見たこともない腫瘍に出会ったりすることもあります。そうした数々の症例から膝疾患の原因や治療経過などを分析し、調査研究を進めています。

スポーツ疾患の特徴的な関連性を見出し、国内外に向けて論文を発表するなど、広く海外に向けて情報も発信しています。「通常ではそんなところは傷まないはずなのに」という部位に半月板損傷をきたした症例は、その大半がサッカー選手であったことを解析し、特有の病態として「Footballer's Meniscus(フットボーラーズ メニスカス)」と病名を付けて世界に発信したこともあります。

山梨の地方都市の病院ではありますが、専門分野をしっかりと調査分析し、地域から国外に発信した情報がアクセプトされることは、大きなやりがいにつながっています。

## —関節鏡視下手術を受けた患者さんからの感想を教えてください。



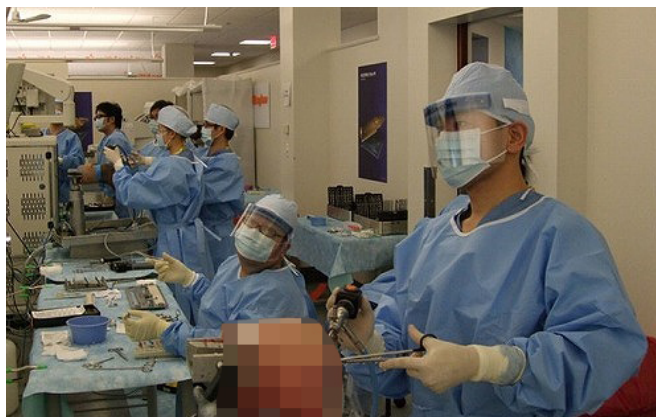
関節鏡視下手術の数々の難症例をこなす (病院提供)

スポーツ選手の方々から、「治療する前の状態より競技レベルが高くなった」というお声をいただくことがあり、大変うれしく思っております。「痛みが少ない」「傷口が目立たない」という声もお聞きます。

当センターは日常生活までの回復に留まらず、競技者がフィールドに立てるまで、しっかりとサポートすることを心がけています。保存療法・外科的治療共に、復帰までの計画的な後療法指導、リハビリテーション、アスレチックトレーニングなどの治療を施しています。

遠方の患者さんは、当院で手術をしてもリハビリまでは通いきれないので、リハビリテーション科の先生達と共に各疾患別のリハビリプログラムを作成し、それを参考に地元でリハビリができるようにしています。そういった点も、患者さんから高い評価をいただいているようです。

——関節鏡視下手術の症例数が多いということは、これから膝分野の整形外科医を目指すドクターにとっても、格好の学びの場となりますね。



関節鏡視下手術の研修風景 (病院提供)

はい。膨大な数の膝関節治療をやっているので、膝の関節鏡視下手術を学びたい人は、密度が高い経験を積むことができます。

いま甲府周辺には膝に関して専門的な治療を施す施設がほとんどないので、当病院に患者さんが集中して来てくださるのはうれしいのですが、その分スタッフ不足に悩んでいます。沢山の患者さんが来てくださっても、それに対応するマンパワーが不足しているので、膝治療に興味を持つドクターの方に来ていただけたら本当に嬉しいです。

整形外科は力仕事が多い中で、膝の内視鏡は手先を使う細かい作業が多く、被爆をすることもないので、女性のドクターにも向いている仕事だと思います。

——落合先生の関節治療にかける思いや、やりがいを教えてください。

学生時代に観た医療ドラマの受け売りなのですが、「医療者にとって大事なものは、患者さんを安心させること」ということを、いつも念頭において医療に携わっています。

そのためには、相当の知識・技術をもって診療に臨まなければならないのは、もちろんのことです。その上で、患者さんとの信頼関係が得られ、うまく治療が進んで競技に復帰していただくことを、やりがいと感じています。

自分が治療を手がけた患者さんが、スポーツの第一線のフィールドでがんばっている姿を見たときは、感無量になりますね。

トレイルランナーの世界ランカーやサッカー・バレー・バスケのプロチーム選手の治療に携わることもあります。最近では大学学生時代に治療にあっていた選手が、ラグビーワールドカップのレギュラーに抜擢されていました。世界の強豪を相手にワールドカップでがんばっている姿を見たときは、胸が打ち震えました。

スポーツ医学は、比較的短期間に治療の成果を確認することができるという点で、医師として大きなやりがいを感じることができる分野だと思います。

——**落合先生の今後の目標を教えてください。**

日々研さんを積み、低侵襲かつ最先端の治療を提供していきたく思っています。とくに日進月歩で進んでいる再生医療を取り入れることで、今現在治しきれない病態をも回復させていければと考えています。

当センターの発展が、スポーツ選手たちの躍進や、高齢者の患者さんたちの膝寿命の延長につながれば何よりです。

◆**落合 聡司（おちあい・さとし）氏**

1997年に山梨医科大学を卒業後、同大学整形外科学教室に入局。その後整形外科医としてさまざまな病院で経験を積み、2005年4月広島大学整形外科学教室で自家培養軟骨移植術を学ぶ。同年10月国立病院機構甲府病院の整形外科に移り、2007年に同スポーツ・膝疾患治療センター長就任。山梨大学整形外科学教室 臨床准教授、山梨学院大学ラグビー部チームドクター。

【取材・文＝伊藤 樹理】